



宮城学院の植物たち その4——ツリバナ——

栗原 健
木村春美

「宮城学院の植物たち」のシリーズ第4回はツリバナを取り上げます。まず、ツリバナのつくりや生態について木村が紹介し、自然界の摂理とレジリエンス（回復力・再起力）について見ていきます。その後に栗原が、新約聖書中のイエスの言葉や星野富弘さんの詩画をもとに、ツリバナが示してくれるメッセージを読み解いてみます。

1. ニシキギ科ニシキギ属 ツリバナ

山と溪谷社から出ている『木に咲く花 離弁花②』に、「一度見たら忘れられない花」「実物ぴったりの名前」(p. 420) とあります。ツリバナを見たことがない方は、この年報のページをめくって写真（白黒ですが）を見る前に、どんな花か想像してみてください。その名前の通りに、直径6～8ミリほどの花が数個から10数個が柄からぶら下がって咲きます。花の色は淡緑と形容している図鑑も淡紫と表現している図鑑もあります。桜の御衣黄（ギョイコウ）や鬱金桜（ウコンサクラ）をご存知の方は、それよりさらに薄い色合いだと思っていただくと「近からず遠からず」というところでしょうか。花弁・めしべ・芽鱗はいずれも5枚、枝分かれした柄にぶら下がり、いくつも集まって、でもそれぞれが気の向くままにあっちこっちを向きながら丸っこく咲く姿が愛らしい花です。直径1センチほどの球形の白い実ができますが、実は初秋に濃紅色に熟し、それがやはり5つに割れ、中からこれまた5個の種が顔を出します。そのぶら下がった姿を星野富弘さんが詩画にしておられます。

葉は対生で、長さが3～5センチの少し長めの卵形、鋸葉は細かいギザギザで、葉が波打つのが特徴です。樹木は高さ1～4メートルとされ、山地の林に生える落葉低木ですが、その可憐で風情ある姿から茶室のある日本庭園にもよく植えられているそうです。木村が日本庭園で一度も気づいたことがないのは、素人には花や実の時期でないと見分けにくいからでしょうか。「緑を守り育てる宮城県連絡会議」事務局長の佐藤修さんも、特に花に出会うのは稀で、見ることができた時はラッキーだと思ってお話してくださいました。花期が短いためかもしれません。

蛇足ですが、ツリバナを愛でるなら雨の日を推します。葉が艶を増し、雨粒を湛えた花が輝いて見えます。

2. 自然の営みとレジリエンス

宮城学院敷地内の遊歩道脇で見つけた写真左のツリバナの樹は、実は、強風で倒れた大木の巻き添えになり、根こそぎやられてしまったようです。倒木に伴い斜面崩壊も起こっていました。倒木や土砂の下で密かに命を繋いでいてくれるのではないかと、あの可憐な花と実に遊歩道でまた出会いたいと願う気持ちから、なんとなくその辺りを捜してみますが、未だ再会は果たしていません。けれども、森の中では倒木や斜面崩壊のような変化や変動は日々あちこちで繰り返されている日常であり、命の再生の営みの一部です。「宮城学院の植物たち」のシリーズ第2回『資料室年報第26号』（2020年度）で取り上げたカヤランも、強風の後で遊歩道を歩くと枝に絡みついたまま落下しているのを毎年目にします。救出作戦と称して、落下したカヤランの花芽をなんとか開花させ命をつなごうと試みますが、ほぼ確実に不成功に終わります。そして、それでも、モミの大木を見上げるとあの愛らしい黄色い花を毎年確認することができます。今年、仙台市太白区にある治山の森で山桜の幹にカヤランを見つけました。前述の佐藤修さんも桜の木でカヤランを見たのは初めてだとおっしゃっていました。「条件が整ったのでしょうか」とも。自然は弱くもあり強くもあるのだと教えられている気がします。

東日本大震災は「壊滅的」と表現されるような被害をもたらしました。それでも、壊滅したと考えられていた海岸近くで、高い樹々は倒れてしまっても、低木やかたて森であったところで暮らしていた動植物の中にはしぶとく命を繋いだものがいたことを、例えば、東北学院大学の平吹喜彦先生が福島大学の研究者と共同で震災後の里浜などを調査し報告していらっしゃいます¹。自律的に再生しつつある地域、復興のために人の手が入り植林などが進んだ地域、その両者が関わりを持ちながら植生を変化させていく様相の記述はズブの素人の理解を超えています。それでも自然に備わるレジリエンスを感じることはできます。



2021年5月10日撮影



2022年5月8日撮影

3. イエスの言葉から

植物と聖書の間には、深いつながりがあります。聖書には花や樹木について触れた言葉が数多くありますが、中でもよく知られているのが、マタイによる福音書第6章にあるイエスの言葉です。「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の1つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ」(28節b-30節 新共同訳)。神の愛を受けて無心に咲いている花の姿から、余計な思い煩いにとらわれずに素直に生きる大切さが説かれています。ここでイエスが指している植物については、アネモネと見る説、アザミとする説などがありますが²、健気に咲いているどの花についても言うことができるでしょう。

このイエスのメッセージは、この星野富弘さんの詩画³(富弘美術館様提供)の中にも響いています。

「下を向いていても
心はあなたを
仰いでいる
何があっても
いつも喜んでいよう
あなたの手に
ぶら下がって
今日も生きている」

ツリバナの特徴は、柄からぶら下がって咲く花の姿です。ぶら下がることは、上の柄が支えてくれるからこそ可能になります。その支えを信じて素直に咲く、それは確かに神を信頼して生きる姿と重なりますね。

この姿は、イエスの別の言葉を想起させます。ヨハネによる福音書には、十字架にかかる前夜、イエスは弟子たちに次のように語ったと記されています。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。(略)わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」(ヨハネによる福音書第15章4-5節 新共同訳)

この言葉を読む時、私たちは、「何をしたら、自分はイエスとつながっていられるだろうか」という点に集中しがちです。しかし、ここでまず味わいたいことは、イエスが私たちとつながって下さっている、私たちを決して離さずに支えて下さっているからこそ、自分もつながることができるのだという、その恵みでしょう。星野さんの詩のように、「あ



下を向いていても
心はあなたを
仰いでいる
何があっても
いつも喜んでいよう
あなたの手に
ぶら下がって
今日も生きている
富弘 画

あなたの手に ぶら下がって 今日も生きている」ことができるのは、すでにイエスが上から掴んでいて下さるからです。

「ぶら下がって生きる」と言うと、依存して受身的に生きているような印象があるかも知れませんが、それは違います。自分を支えてくれる超越的存在に信の土台を置くことは、困難に吞まれずに強く歩んでいく力を与えるものです。頸髄損傷のために手足の自由を失いつつも、口に絵筆をくわえて美しい作品を描いて来た星野さんの生き方に、その力は現れています。それはまた、自律的に再生していく植物のレジリエンスとも重なり合うものがあるでしょう。

このように、植物の姿は私たちに多くのことを教えてくれます。「植物に取り囲まれているわれらは、このうえもない幸福である」(『植物知識』より) という牧野富太郎の言葉は、聖書の言葉と併せて読む時に、一層真実味を帯びて来ますね。

(注)

1. 山ノ内 崇志・曲渕 詩織・川越 清樹・平吹 喜彦・黒沢 高秀「東北地方太平洋沖地震の津波後に自然に再生したクロマツ低木疎林と生育基盤盛土上に植林された海岸防災林の植生およびその表層土壌環境」『植生学会誌』2021年、第38巻、第2号、pp. 191-208。
2. 荒井 献『『野の花』はあざみ—イエスの自然観に寄せて』『荒井献著作集』第9巻、岩波書店、2002年、83-95節。
3. 星野富弘『あの時から空がか変わった』いのちのことば社、2016年、p. 78。

(くりはら けん / 宮城学院女子大学一般教育部准教授)

(きむら はるみ / 宮城学院女子大学一般教育部教授)